久我記念美術館

3月個展　3月9日(火)～21日(日)
（月曜休館・入場無料）

谷口 路子 展

久我記念館では、３月９日から２１日まで谷口路子展を開催します。この企画展を開催するにあたって、谷口さんからのメッセージをご紹介します。

“私にとって、コラージュ制作は、自己発見の過程であり、イメージの物質感みたいなものから始まった。偶然的に出来るものは、客観的偶然であって、ある種の必然性も要する。具体的なものは、かかなくても絵に「意味」を感じる事が出来る。ものに具体的な意味があり、作品に物語性を感じられる糸口にはなるが、物の意味と言うより、質感の意味がすべてを伴っている様である。「物質的想像力」という考え方、内密性又は、内面性にこだわり、具体的なイメージを使って観念化する楽しさは充分ある。”

〔画　歴〕

- 西部女性展
- 九州現代美術の動向展
- 九州女流画家展
- 八人の女性展
- 詩画集「たびびと」
- 福岡市美術連盟展
- ミレニアム展

2月の企画展
22日まで岩田秀昭展を開催中です。

まちの史跡めぐり……83

町文化財専門委員　石瀧　豊美

古新聞切抜帳から…
＝福岡日日新聞と福陵新報・九州日報＝

第六七回で、金錆焼について の新聞記事を紹介しました。今回は、それ以降の金錆焼関係の記事、および当時の須恵村に関する記事を集めてみました。

◆　◆

明治21年12月7日(福陵)

○伝授の為　粕屋郡須恵村には、此程、消防組を組織し、喞筒(ポンプ)を購入れたるも、之を使用する術を合点せざれば、当地の官設消防組中一両名、同村に出張りて伝授されたき旨、申込みありたるより、同組の内二名程、伝授の為め赴く筈なり、と云ふ。

明治24年1月11日(福陵)

●陶器鑑定　玉ノ井騰一郎氏が、粕屋郡須恵にて焼立つる金錆焼は、此程竈開きをなし、博多に着したるにつき、昨日県庁より農商工係り佐伯、古賀の両属が、同氏方へ出張し、器物の鑑定を為したるよし。

明治24年3月27日(福陵)

●須恵小学校の免状授与式

糟屋郡須恵小学校は、去廿四日、免状授与式を挙行したるが、二年期生伊川直衛といふは、年僅かに五年八ヶ月なれども、見事三年期へ昇級したるより、職員何れも感じ居るよし。尚ほ、同地医師田原養卜氏は、平素学事に熱心せる人にて、此度も、優等生へ読本一冊宛賞与したりと云ふ。尚ほ、同校は追々生徒増員して、校舎の狭隘を告るに至りしを以て、本年挿苗後、直ちに新築に着手する筈なりとぞ。

明治24年4月3日(福陵)

●金錆焼の外国輸出　当地玉ノ井騰一郎氏が、粕屋郡須恵村にて焼立る、彼の金錆焼は、昨年開設の第三回内国勧業博覧会に於て好評を博し、殊に宮内省の御買上にも預りたるを以て、爾来益す職工を励まし、専ら外人の嗜好に適はんことを務めたるが、今度同氏が上京の際、親しく商館に就て取調ぶる所ありしに、元来金錆焼は磁器の部に属するものにして、食器の類、尤も其の嗜好に適し、且つ該品は極めてはじかくして、毀損の患あるにより、之を防ぐ為め、是迄は都て厚手に焼立てたるも、斯くては尠なからざる海関税を要し、之が為め、高価に売扱かはざるべからざるに至り、随て販路の拡張に妨げあるを以て、是非とも薄手に焼立てざるべからず。依て今後は更に毀損を防ぐの方法を設け、遠ふからず、之が計画に着手する趣なり。尚ほ、横浜港に於ては、独逸、魯、米の三商館と契約する所あり。同地本町弐丁目、陶磁器売込商西村彦三郎氏、之を引受、神戸港に於ても、各商館と特約して、同地の後藤勝蔵氏が一手に引受け、周旋する筈なりといふ。

明治24年12月26日(福陵)

●旅石炭坑　粕屋郡須恵村大字旅石炭坑は、博多中対馬小路八尋佐平、川上藤三郎、蔵本町柴田忠次郎三氏の持物なるが、昨今石炭の価格非常に低落し、収支とても相償はざるより、一時は殆んど中止の場合に至りたるを、同地事務長角岡晋太郎氏を始め、光安甚八、安松良平等の諸氏大に尽力し、坑夫の採掘賃金は半額に減じ、地元の斤先金■高より四分を減じ、又事務員の給料等も幾分節減し、以て其維持法を求めたるに、何れも快よく承知し、共々維持に尽力なしゝより、今日にては好都合の運びに至りしといふ。

明治25年9月3日(福陵)

●消防員と炭坑夫の対陣　去三十日の夜なり。粕屋郡須恵村新原炭坑々夫弐百名計と、須恵村消防組弐百余名と新原に対陣し、アハヤ一大争動を惹起さんとする折から、斯くの次第を箱崎警察署へ急報するものありければ、詰合の警官はスハ椿事こそ起れりと、直ちに該地へ馳せつけて、双方の間に割て入り、百方説諭を加へて、翌三十日の暁天頃、漸く無事に鎮定したりといふ。今其顛末を尋ぬるに、新原坑の石炭は、従来受負採掘にて、頃日盆前となりたるより、以前の受負人は解約され、更に同村々長田原清(精)一氏と、舌間競の両氏が受負ふことゝなりたるが、舌間氏は別に炭坑を所有し、数多の坑夫も使役し居るより、新原炭坑従来の坑夫は一切雇入れざることゝせり。此に於て、該坑夫等は大に憤り、右の両氏を坑内に於て取囲みたるを、須恵村消防員は早くも探知し、もし村長の身の上に不慮のことありては一大事と、一時にどっと押寄せて、遂に斯る場合に至りしものなりとぞ。

〔お詫び〕前回の記事中、二段目七行目の「庚申」は「庚辰」の誤りでした。訂正します。